

C-64 被服構成に関する研究(第6報) —ウールきものの縫製について—
県立島根女短大 ○岡 綾子 野津哲子

目的 衣生活の簡単化から、平常着の衿きものに代るものとして、ウール単きものが登場し、アンサンブルきもの等といわれて好まれるようになった。これは単のウールということ着装し易く、着用期間も夏を除いて長期間着られるうえに、従来の手縫いに替りミシン縫いが導入できることで、整理や管理も容易なことから、平常着として、広く愛用される現状である。そこでウールきものの製作について、この検討を試みたので報告する。

方法 1) 試料としては、ウールきもの用布地の厚さの異ったもの、3種とみた。糸は手縫糸と、ミシン糸の6種を使い、針はそれぞれに適応するものとした。

2) 試料の諸実験

- ・縫い目の強さを、布の厚さと、糸の太さ別に、それぞれ縫合して、シヨッパ型引張試験機で、測定した。
- ・縫製手数の比較では、手縫いとミシン縫いとにした、ミシン縫いでは、待針のみで縫うものと、懸をかけ(3種)で縫うものについて検討した。
- ・縫いしろ始末では、普通仕立と縫いしろを一部カットしたものについて、縫製と、整理について比較した。

結果 縫い目の強さは布の厚さと縫合する糸の太さ間に密接な関連を示したと厚さは正比例した。縫製手数では、待針のみでミシン縫いしたものに効果がみられた。縫いしろ始末では、カットしたものが共によい結果を示している。